

歌が好き

池田 小百合

夢工房

はじめに

私の思い

ある作曲家からエッセイ『歌って暮らせば』（夢工房）の感想として、「楽しく読ませていただきました。続きを期待します」という一行だけのメッセージを見た夫が「大物は細かい事は言わないものです」と言った。「なるほど」。

この一言で、私は迷わず『歌って暮らせば』の続編『歌が好き』を出版することを決めました。『満点ママ』『歌って暮らせば』『歌が好き』の三部作ということになります。

人は、いくつになっても、ほめられ、そして期待されると嬉しいものです。逆に、叱られ、とことん打ちのめされると、立ち直れなくなります。つぶれてしまいます。人にかける言葉は注意したいものです。

あるとき、出版社の編集長に「なぜ、童謡の会を続けているのですか？」と訊かれた。その時は「五ヶ所の童謡の会で同じようにうまくいったという事がないので、次こそうまくや

ろうという事で二十五年が経ちました。『Next number one』と思ってやっています」と答えた。すると編集長は「池田さんは、チャレンジャーですね。わかりました」と言った。「私がチャレンジャー？」チャレンジャーというのは、月面に一步を印したアポロ十一号のアームストロング船長を指すような言葉と信じていた私は驚いた。

今なら「知っている歌を歌う楽しさを伝えたい。勉強した感動を伝えたい。伝えたい事があるから歌う会を続けています。ゴールはありません」と言うでしょう。

私は歌う事が大好きです。私の人生は童謡や唱歌があったから楽しい。これからも、みなさんと一緒に歌い続け、感動していただける童謡の会にしたい。

この本のタイトルを考えている時、『NHK 歌謡コンサート』で、歌手の石川さゆりさんが「あらためて、こんな事を言う」と笑われちゃうかもしれないが、歌が好き」そう言い切つて、さゆりスマイルをみせた。それでタイトルは『歌が好き』に決めました。

表紙カバーの色を考えている時、娘と愛知県田原市日出町ひいちょうの伊良湖ビューホテルに一泊した。恋路ヶ浜の海の向こうに夕日が沈むと、突然、空の青と海の青が一体となって窓が一面青に染まった。ホテルのパンフレットには「ここは空と海に抱かれた青の楽園」と書いてある。それでカバーの色は「青」に決めました。

ここ三年の間に、ロンドンオリピックが開催され、わが家では孫の誕生がありました。めまぐるしく変化していく世の中、記憶が薄れて行くので、書きとめておくことにしました。この本が、読んだ方の生きるヒントになる事を願っています。

池田 小百合

歌が好き 目次

はじめに 3

第1章 日常 11

ほめる 料理 仰天の食材 小さな親切 盲腸炎 長生きの秘訣
笑う わがまま 扇あおぐ よく寝た

第2章 言葉 71

好きな言葉 嫌いな言葉 あいさつ 仰天のこと 奇妙な話 言葉の力

第3章

音楽

121

歌手の健康管理 どの子も育つか いじめ 伴奏の力
自己エコー イランの正月 恐いカニ伝説 奇妙な名前
みんなが歌う 歌は好きですか 「共感」と「反感」

第4章

スポーツ

165

コツを教える 重量挙げ ハンマー投げ バスケツトボール
相撲 競泳 ロンドンオリンピックク 質問 大騒ぎの一日 野球

第5章

悲劇

189

失敗談 誤解 つぶやき 怒鳴る 念ずれば 謎の映画
単純な疑問 悲劇の風化

第6章 悪夢

243

蜘蛛の糸 ゆり坊 イノシシ 小田原の方角 眠狂四郎 綱引き
 接骨院 級長 テレビ出演 罪 自転車 押売り お迎え
 そっくり 遠野物語 ぞうさん 佐藤しのぶ なりたいもの
 花泥棒 殺害 取り返しがつかない 土下座女 会いたい
 迷惑メール 電話詐欺 ヤクザ 死んだ 助かった
 NHKのど自慢 究極の悪夢

第7章

出会い

291

マドンナさん 白浜の人 岸 恵子さん カメラマン
 妖精クリオネ 宮城まり子さん 百歳の人 茂木健一郎さん
 マツモトキヨシさん 今どきの男 辻井伸行さん 團伊玖磨さん
 山本直純さん 井上陽水さん 雅山さん 星の王子さま 消えた男
 仮設の天使 みつはしちかこさん 聞き違いの人 出会い
 平清盛

第8章 時代の流れ

331

レッジウォーマー 天気予報士 娘と私 峠トンネル 肩たたき
父と母 長寿銭 コンビニ 赤鉛筆 しもやけ 図書館
一人で食べる 先生 百歳 銀行 公衆トイレ 丸刈り
東日本大震災 ビートルズ 便利 ゆるキャラ 教育
人生が二度あっても 「兵隊さんの汽車」から「汽車ほっぽ」へ
命 死ぬ 解決策

第9章 季節はめぐる

365

梅が咲いた日 桜が咲いた日 白蓮が咲いた日 今日は何の日
ミズバショウが咲いた日 ヒバリが鳴いた日 奇声を聞いた日
金環日食きんかんじしょくの日 東京スカイツリー開業の日
アジサイとハーブの日 コーヒーの日 草むしりの日 地震の日
あきれた日 モントブレチアが咲いた日 松に驚いた日
避暑地で遊んだ日 縁日 過ぎた日 インターネットの日
『空には本』の日 文化の日 紅白歌合戦の日 年をいただく日

年賀状の日

第10章

出版

397

本は脳を育てる

歌の本『読む、歌う 童謡・唱歌の歌詞』について

エッセイ集『歌って暮らせば』について 書く 話す 読む

第11章

夫婦

429

夫婦の会話 夫を語る 私を語る 感動の童謡・唱歌

夫婦のビジョン (vision) 韓国ドラマ『イ・サン』の会話 京都一人旅

あとがき

493

第1章 日常

ほめる

ほめるのは簡単なようで難しい。

「近所のおばさん」がほめる

小学生の時、小田急線の新松田駅から家まで近所のおばさんと歩いて帰った。私は三歳から毎週日曜日、ピアノのレッスンのために小田原に通っていた。その帰りであった。おばさんは「なんて面白い話をする子なの。あなたの話聞いていたら、もう家に着いてしまったわ。ありがとうね」と私をほめた。私は親にほめられた事がなかったので嬉しかった。その嬉しさは、五十年後の今でも昨日の事のように覚えている。一方、母は私の話を聞いて「あなたの話は、よくわからない。つまらない」と言った。小学校の教員だった母は、自分の子どもに接する機会が少なく、私の事が理解できていなかった。

また、ある日、御殿場線の線路の上から、わが家に向かって歌を歌っていると、同じおばさんが「いい声だね、レコードかと思った」と私をほめた。当時、この地域の御殿場線の沿線には、私の家しかなかった。私は歌う事が大好きで、いつも歌っていた。一方、母は私の歌を聞いて「かん高い声だね」と嫌な顔をした。私は背が低くて痩せていたので、発声練習などしなくても高い声が出せた。

今年の夏、そのおばさんが道の向こうから「いつも畑の草むしりをよくやっているね。頑張るね」と私をほめた。私は、この年齢になっても、ほめられたことが嬉しかった。その人は高齢のおばあさんになっていた。踏切の向こうのマーケットに行くのでしょうか。藤色の大きな帽子を被って、きれいな身なりをしていた。「その帽子似合いますよ」と言うと、おばさんが「いくつになつたと思う?」「さあ、わかりません」「もう、九十三歳よ」と言った。私の人生に一番影響を与えてくれた人です。ここで何か一言、お礼の言葉を言っておかなければいけないと思いました。とっさに「私は、おばさんが大好きだよ」と言いました。すると、思いがけない言葉が返ってきました。「近所はいいね」と。

この話を童謡の会でした。「みなさんは、どうですか。九十三歳になった時、何もかもを超越して『近所はいいね』と言えるでしょうか。また、九十三歳になった時、自分の子どものような人から、『おばさんが大好きだよ』と言われるでしょうか。いかがですか。私の場合は、九十三歳まで生きるのは大丈夫と思いますが、あとの事項はダメと思います」。すると、みんなが感動し、中には「これからの人生を心して生きて行きます。よいお話を、ありがとうございました」と言っ

て帰る人もあった。

私は、このおばさんに、また、ほめられたいなあと思っています。

「不良の子」をほめる

高校生の時、ミドリちゃん(仮名)という子がいた。いわゆる不良だった。ミドリちゃんが言った。「担任が、『二学期は、よく頑張りました』って言ったんだぜ。二学期は、一学期より勉強しなかったのに。頑張ってねえのに、うるせえんだヨ」と。先生は、成績が一学期より二学期の方が良かったのでほめたのだろうが、これでは、ほめたことにならない。次につながる、やる気が出る、ほめ方をしなければいけない。やる気を引き出すほめ方は難しい。

その教師は、私にも言った。「なぜ君たちは、いつも一緒にいるんだ」と。不良のミドリちゃんと、本ばかり読んで下を向いている私の組み合わせが不思議だったでしょう。朝も帰りも一緒にいたのは、帰る方向が同じだっただけで他に理由はない。特に仲が良かったわけでもなかった。私は遠距離通学で疲れ切っていた。他人とかかわりたくなかった。話をして笑ったりする元気がなかった。エネルギーは通学に費やされていた。

ミドリちゃんについては、奇妙な記憶が断片的に沢山ある。試験が近づくと、突然、私に数学の解き方の質問をした。質問された問題は、私もわからなくて、それが試験に出て、二人ともバツだった。二人で笑った。そんな仲だった。

「今日は年賀状の当選の賞品交換の最終日だから、これから郵便局に行く。遅刻するから頼むね」

「きれいなクレヨンを買ったので、今日は多摩動物公園へ、キリンの絵を描きに行く。学校を休む。ヨロシク」と言つては、ミドリちゃんは遅刻や欠席をした。

ミドリちゃんは体育が大の苦手で鉄棒で片足上がりができなかった。ぶらさがつたままだったので、先生が「なんだ、お前」と怒つた。それに対して「片足上がりができると、何かいいことつてあるんですか、太股に筋肉がつくと何の役に立つんですか？」と言ひ返した。すると、若い体育の先生は返事に困つた。「ワー、真つ赤になつた」とミドリちゃんが大声で叫んだので、先生は授業ができなくなつてしまつた。私には何の事か理解できなかつた。ミドリちゃんは私にむかつて、「あんなに高い鉄棒で、クルクルよく回れるなあ」と言つた。私は鉄棒が得意だつた。

さらに、ハードルの授業は、みんなが苦手だつた。高校生になると体が大きくなるからだ。一番小さな私が一番最初に跳んだ。私はハードルが得意だつた。みんなは、「彼女（小さい私）が跳べる高さなら自分も跳べる」と安心した。ハードルは次第に高くなつた。私が跳べたハードルを、ミドリちゃんは全部倒した。気合が入つていないので倒しながら跳んだ。先生が「なんだ、またお前か」と怒つた。ミドリちゃんが、「あんなに高いハードル、どうやって跳んだんだ？」と私に訊いた。「すごいな」と尊敬された。ミドリちゃんは、お尻が小さくスタイルがよかつた。足が長くモデルのようだったので体操着も似合つていた。

高校を卒業すると裁縫の専門学校に行き、子ども服のサンプルを縫う人になつた。遊びに行つたアメリカから帰国すると、家が全焼していた。それは放火で、兄が三億円事件の犯人と思われたいらしいという噂が流れた。詳細は不明だが。当時、年齢が近い・モニタージュ写真に似ている。

電気関係に詳しい」などの類似により、一万人の青少年が警察の捜査線の上にリストアップされていた。

詩を書いて手作りの詩集を作り、路上で売ったりしていた。その詩集には、挿絵として色鉛筆を使ったスケッチが掲載されていた。繊細な風景画だった。詩の方は、たいした事が無かった。それでも買い手があったようだ。

その後、映画の脚本家の奥さんになった。ミドリちゃんは、かわっていた。勉強はせず、好きな事だけをしていた。元気が無く虚脱状態で、ゆるゆると生活していた。背が高く、ほっそりとした美しい人だった。彼女だけが、一般人には理解できない向こうの世界に住んでいた。それは、もちろん教師には到底理解できない世界だった。私はミドリちゃんが好きだった。

「女優」をほめる

童謡の会で、好きな女優をほめた。「映画『滝廉太郎物語』に出演した壇ふみ、『一枚の葉書』の大竹しのぶ、NHK大河ドラマ『江(ごう)』の宮沢りえ、『平清盛』の松田聖子、『坂の上の雲』の松たか子、『木枯し紋次郎』の大谷直子や扇千景、きれいで、すてきでしたね」と、ほめた。共感を得られると思っていたが、「きつくてイヤダ」「好きじゃない」「大嫌い」と、ブーイングの嵐になった。中には「観たくもないわ」と言っている人もあった。私が、いいと思っても、他人は違う場合がある。いろいろな見方があるものです。

「小学校の先生」がほめる

小学校の先生が、大声で言った。「このホテイアオイをつぶしたのは、だれだ」と。だれも手をあげなかった。叱られると思ったからだ。だれかが水槽の水の中でつぶした。気泡が出て気分が良かったので、次々と全部つぶしたのだ。先生は、叱るつもりではなかった。「おまえだったのか、よくやった」と実験をした子をほめたかっただろう。後日、つぶした子が判明し、ほめられた。ホテイアオイは、別名ウォーターヒアシンズという。花期は七月から九月。紫色の花は一日花。

小学校の先生が、大声で言った。「近所の人から『バス停に花を活けている子がいる』と通報があった。いったいだれだ」と。だれも手をあげなかった。叱られると思ったからだ。だれかが牛乳ビンに彼岸花を活けていた。先生は、「おまえだったのか、よくやった」と、優しい心の子をほめたかっただろう。後日、花を活けている子は判明し、ほめられた。このように、ほめるのは難しいものです。

料理

美味しいものを食べたい。

「アグネス」の料理

テレビに歌手のアグネス・チャンさんが出ていた。アナウンサーが「得意な料理は何ですか」と聞いた。アグネスは、「冷奴です」とふざけた。「トマトと豚肉のスープも美味しいですよ」「味噌を入れるんですか」「はい、そうです。やってみてください。ほんとに美味しい（のことあるよ）」。さっそく「トマトと豚肉の味噌汁」を作ってみた。春先に採れる笹竹（またはキャベツ）を刻む。豚肉を刻む。トマトは湯むきして刻む。これが具で、あとは味噌汁の要領で完成。「きれいな色、いただきます。おいしい」。

笹竹で作ると、まるで高級料亭の料理のように美しい。キャベツだとシャキシャキした歯ごたえが楽しめる。トマトのリコピン（リコペンともいう）は、タンパク質と一緒に摂取すると吸収が良く、体内が活性化され、健康と美容に好いそうです。お試しください。

「佐賀のがばいばあちゃん」の料理

『佐賀のがばいばあちゃん』は、タレント島田洋七さんの小説。戦後の動乱期、広島に暮らす昭広（島田洋七の本名）少年は母親に女手ひとつで育てられている。働く母を恋しがって、まだ幼い昭広が物騒な夜の盛り場にやってくるため、懸念した母親がだますようにして、佐賀の昭広の祖母・おさのばあちゃん（本名は徳永サノ）の家へ送るところから物語が始まる。おさのばあちゃんの家は超のつく貧乏であり、ばあちゃんは苦労人だった。例えば野菜や果物は川の上流から流れてくる物を拾い集めて食べていた。

ある時、テレビで「残った正月料理を美味しく食べる」という番組を放送した。島田さんが、「残った寿司にお茶をかけて食べると美味しい」と言った。その場にいたタレント全員が食べた。そして言った。「これが、うまいのか?」「だれだ、こんな事をして食べるって言ったのは?」「はずかしいぞ」。口の悪いタレントたちが、一斉に非難した。島田さんは、一人黙々と食べて笑っていた。

『佐賀のがばいばあちゃん』は、テレビドラマ化、映画化、舞台化、漫画化された。私はテレビドラマを観たが、残った寿司にお茶をかけて食べたことはない。

「平野レミ」の料理

料理研究家の平野レミさんがおもしろい事を言っている。「どんな食材でも食べられない食材は無い。炒める時間が短くて、よく炒まっていなくても食べられる。煮物の味付けに失敗しても食べられない事は無い。どうしても食べられるのだから、何でもチャレンジしたらいいです。めげる事は無いです。料理は楽しくやりましょう」と。なんともおおらかな人です。

仰天の食材

仰天の食材は沢山ある。

「白い粉」に仰天

娘が盲腸炎の手術のため病院に入院した。だれもない娘のアパートの部屋の冷蔵庫を開けて仰天した。冷蔵庫には何も入っていないかった。もっとよく見ると、大きな缶に白い粉が入っていた。これはいったいなに？ 怪しい物だ。危険なので流しに捨てた。水道の水を流すと、流れて消えた。その粉については、そのままになった。娘は退院し、元気になって大学を卒業し、就職、結婚し子供ができた。

私は、今日（平成二十七年）、薬局でコラーゲンを買った。顔が壊れたので治るように願って白い粉を水に溶かして飲んだ。グレープフルーツの味がした。「娘の部屋の冷蔵庫にあった白い粉はコラーゲンだったのか」と思い当たった。捨ててしまってもつたいない事をした。

三省堂国語辞典でコラーゲンを見ると、次のように書いてあります。

「Collagen 動物の皮・軟骨・腱などを構成する、繊維状タンパク質。ゼラチンにして化粧品にも用いる」。私は「動物の皮」の所を読んで、薬局で買ったコラーゲンのステックを急いで捨てた。だれの皮・軟骨・腱から作ったの？

高校の生物の教師だった夫が次のように説明してくれた。

「コラーゲンは、タンパク質の一種です。食べると分解されてアミノ酸になる。コラーゲンは、食べてもそのまま移行しない。皮膚になったり体を作ったりしない。四足動物、例えばブタを食べてもブタにはなりません。ブタのタンパク質をアミノ酸に分解して吸収するからです」。

「エシヤレット」に仰天

NHK『ためしてガッテン』を観ていた。今日のテーマは「らっきょう」。「みなさんが味噌を付けて日常食べているエシヤレットは、らっきょうです」という放送に仰天した。「エシヤレット」という名前を付けた人も出演した。「こんなに全国的に知れ渡るとは、思いもみませんでした」と言った。「そうだったのか」。この仰天の余韻は、いつまでも続いている。私は「らっきょう」が大好物です。毎食三粒食べている。

「アンデスメロン」に仰天

日曜日、NHK『うまい!』で、「アンデスメロン」を放送していた。アンデスメロンは日本で生まれたメロン。名前の由来は「安くて安心、食べて安心なメロンです」ということで「アンデスメロン」という説明だった。本当だろうか？

「タラの芽」に仰天

「今日は、旬をむかえたタラの芽のハウスにお邪魔します」と、テレビのアナウンサーが言った。私はタラの木は大きいから、随分大きなハウスだろう。何本生えているかな、と思って観ていた。ハウスは大きかった。中に入ると、タラの木は生えていなかった。農家の男の人がプランターの前に屈み込んで、椅子に腰かけて収穫作業に追われていた。タラの木は二十センチぐらいで、一本に一つの芽が付いていて、それをハサミで切って収穫していた。私は拍子抜けした。「美味

しいタラの芽が沢山採れました。スーパーなどで見かけたら買ってください」と農家の人が宣伝した。

この事を夫に話すと「タラの木は、二メートルぐらいで、さほど大きくない。芽が出ても手で収穫できます。せいぜい高い所は三脚が必要なくらいです」と何気なく言った。「え、そんな事はないわ。タラの木は、見上げるほど高く、その先端に新芽が出るのよ。私などは、まるでとどかないわ。長い梯子が必要よ」「ははあ、それは、あなたは小さいからです」。夫は一メートル七十五センチ、私は一メートル四十五センチ。タラの芽の認識に、これ程の違いがある。

「原木は、そのつど新しくするのでしょう。きっと高値で料亭に出荷されるのです」と夫が言った。春は山菜のおいしい季節。

「ドクダミ」に仰天

渋谷駅前の路地を行くと、家の庭一面にドクダミを干しているおばあさんに出会った。

「他人からもらったドクダミを干しているんです」「沢山ありますねえ。煎じて飲むと体にいいんですよね」「面倒だと、捨てるのはもったいないから、こうしてやっている」。

父や母もドクダミを干して煎じて飲んでいた事があった。二人は、すぐにあきてやめた。飲まなくても元気で、目に見えた効果が無かったから。

家に帰り、庭を見るとドクダミの白い花が咲いていた。庭中のドクダミは夏草と一緒にうつそうと生い茂っていた。一日中草むしりをした。裏庭の、ほんの一部分が、きれいになっただけで、

腰を痛めた。腰がピリピリする。元気をふりしほって童謡の会をした。さすがに会館の倉庫から長い机を運び出すことができなかった。

童謡『ぞうさん』の作詞者のまど・みちおさんの話を思い出した。奥さんとお嫁さんが庭の草むしりをしていると、まどさんが「やめなさい、草も生きています。美しいじゃないですか」と言ったという。雑草が美しいとは、まどさんらしい発想です。

ドクダミは、初夏から夏にかけて、花は茎上方から伸びた花茎の先に淡黄色の穂状花弁をつけます。花穂の下に白色で十字形に四枚開いているものが、一般に花びらだと思われていますが、これは葉に近い性質をもった苞と呼ばれるもので、実際のドクダミには花弁も、がく片もなく、黄色の部分は雄しべの先端の葯が密集したものです。ドクダミ茶の飲用による副作用がある。

「かんでんばば」にはまる

長野県の知人から「かんでんばば 牛乳寒天の素」をもらった。袋には「熱湯に溶かして冷たい牛乳を入れるだけ。牛乳をさらにおいしく」と書いてある。私は牛乳が苦手です。飲むとお腹がゴロゴロする。

「日本人の八割の人が乳糖を分解できない体質。だから牛乳を飲むと消化不良でお腹がゴロゴロするのです。今は、お腹がゴロゴロしないように成分を調整した牛乳を売っている。それを買って来て、やってあげましょう」と夫が言い、台所で牛乳寒天を作り始めた。大きな夫が小さな手鍋を持って、寒天を溶かしている姿は、ほほえましい。水や牛乳を計る時は、理科の先生らしく

計量カップを目の高さにする。

「美味しい。うまく固まったね。袋の調理例の写真のようだ」「これは、かきまぜるだけですから、だれにでもできます」「棒寒天は、溶かすのが大変。溶かす所で失敗する」「そうだね」。

私が「美味しい、美味しい」と言ったので、三袋はすぐに食べ終えた。三袋とも夫が作った。「かんでんばば」という商品名がおかしい。だれが、やってもうまくできる。失敗がない。

その後、近所のスーパーに伊那食品工業株式会社（長野県伊那市）の「かんでんばば」を買に行ったが同じ物はなかった。別の粉末寒天を買って試したが、微妙に歯ごたえが違う。美味しなかった。夫が「また、もらえるといいね」と言った。夫は「かんでんばば」になった。

ある日、隣町の農協に行った。なにげなく商品の棚を見て驚いた。そこに「かんでんばば」があった。しかも、その会社の全種類がそろっていた。私は大喜びをして、娘にも童謡の会員にも、友人、知人にも配った。

商品を見ていると、同じ年齢の主婦が、「私も、これを買いに来たのよ。これって、美味しいよね」と言った。私が「でも、だれにあげても『美味しい』とか、『ありがとう』とか言わない。なぜかしら」と言うと、「へー、そうなの。ウチでは、娘たちが来ると、作るのよ。みんなが大好き。三袋で、この値段じゃあ高いわよね。もらった人は、こんなに高い値段だとは思っていないわ」「そうですよね」となった。

気を良くした私は、十袋買った。その奥さんが大声で「この人、こんなに沢山買ったわ」とレジの中年男性に言うと、その男性が「これって、美味しいですよね」と言った。農協にも「か

んでんばば」がいた。「かんでんばば」は美味しい、楽しい、嬉しい、大好き。

「クロワッサン」ユングルス

童謡の会員に「役場の隣のパン屋のパンが美味しい」と教えてもらった。行ってみると、クロワッサンが二個しか売っていなかった。「他にはないの？」とショーケースの前に立っている店員に聞いたが、返事がなかった。店員は黙って立っていた。まだ十一時四十五分だ。私は「残り物を買うのは、いやだな」と思ったが、私が一個買い、もう一人の人が一個買った。もう一人の人は午後から仕事があるようで、「一個でもいいわ。これでお昼にする」と言った。私は、つぶれないように持ち帰るのに苦労し、丸めてふたくちで食べ終わった。味を覚えていない。夫にこの話をする時、「あなたは、クロワッサンには、うるさいから」と笑った。

中学生の時、調理実習があった。私は「ゆで卵切り器具」を持って行く役で、母が「そんなものは、家がない」と言い、わざわざ松田中学校の隣の金物屋に行つて買つて来てくれた。それ以来、「ゆで卵は、包丁で切ればいい」と思っている。パンの係りになった子が「クロワッサン」を持って来た。そして「朝食は毎日クロワッサンよ」と言った。私は、その時はじめてクロワッサンを見た。「かっこいい、美味しい。みんなの家では、こんなに美味しい物を毎朝食べているのか、いいなあ」と思った。それ以来、クロワッサンにうるさくなった。

美味しいクロワッサンは、なかなか売っていない。時間が経つたクロワッサンは、ペタンとしていて、まずい。クロワッサンを売っていないパン屋は次々姿を消して行く。役場の隣のパン屋

も、すでない。クロワッサンはパン屋のシンボル、そして明るい家庭の象徴、と私は信じている。

「スイカ」を食べる

お寺の隣に大きな百姓家があった。その家には井戸があった。昔はどの家にも井戸があったが私の家にはなかったので珍しかった。小学生の私は、中をのぞき込んで驚いた。「アッ、スイカが落ちている。大変だ」。友だちと引き上げることにした。子どもにとって、そのスイカは重く、なかなか上がって来なかった。汗びっしょりになり、「わっしょい、わっしょい」と、大騒ぎをしていると、その家のおばさんが飛んで来た。「まあ、まあ」と言っ引上げるのを手伝ってくれた。そして「食べる？」と言ひ、スイカを切ってくれた。みんなではおぼった。その切り口は大きく、私の家では食べた事のない大きさだった。真つ赤に熟れていて美味しかった。私は、「よその家では、こんなに美味しいものを食べているのか、いいな」と思った。スイカを一生分も堪能した。

スイカは百姓の家で作ったもので、朝取りの新鮮なスイカだった。仕事の後、家族で食べようと冷やしてあったのだと気がついたのは、ずっと後になってからです。大人になった私は、時々、「美味しかったなあ、また食べたいなあ」と、井戸のスイカを思い出します。

今、お寺の隣は更地になっていきます。アパートが建つようです。立派な平屋の家も馬小屋も井戸もありません。スイカを食べさせてくれたおばさんが亡くなったのでしょうか。お礼が言えません。

「餃子」を食べる

私は、小田急線の新松田駅から東京の中学、高校、大学に通学していた。朝昼晩と三度の食事を外食ですませていた。昼は菓子パンとコココーラだったりした。「コークとよぼうコココーラ」のコマーションルが流行っていた。家では父と母が痴呆の祖母の介護に追われていた。家庭環境は最悪で、私の事は放っておかれた。学校が終わると仙川の桐朋学園のピアノのレッスン室に行き、ピアノとヴァイオリンの練習をし、終電で帰宅する毎日だった。桐朋学園は、夜学があったので、レッスン室はいつでも使えた。レッスン室には二台ずつグランドピアノがあった。桐朋学園の友だちが沢山でき、音楽の話をお話して語り合った。次第に音楽にのめり込んで行った。音楽は暗い現実の生活の救いだった。この事を、学校の担任や親は知る由もなかった。だれも私の事を気にしていなかった。

ある日、一人で新宿のビルの中の小さなレストランで食事をした。一人だというのに、丸いテーブルにいっぱい料理を注文した。ウェイトレスが驚いているのがわかった。白い大きなお皿に乗った大きな餃子が運ばれて来た。今まで食べた餃子の中で一番おいしかった。私は餃子が大好き。次の週、また新宿に餃子を食べに行つた。おや、レストランがなかった。ビルを間違えたかと思つて、外に出て確かめたが、レストランは見あたらなかった。結局、二度とあの大きな餃子に出会う事はなかった。私は、もういちど大きな餃子を食べたいと思つている。

今、よく考えると、レストランには客が誰もいなかったように思う。客についての記憶がない。きつと、あの後すぐ閉店したのでしよう。私が最後の客だったかもしれない。開放的な別世界、

夜の新宿。キラキラ輝くレストラン、静かな音楽が流れるテーブルを覚えている。しかし、私は二度と一人で外食をすることは無い。食事は家族とするものです。今、家族との食事は楽しい。

あきれた食事

「ナスは買わないわ」「油いためにすると、美味しいよ」「ナスは栄養がないわ」「ナスに栄養を求めているのかい。そりゃあ無理だよ」「ナスは小さい頃、さんざん食べたわ」。

十歳ぐらいの時、洋間と台所を残して、家を新築した。大工さんが朝早くから夜遅くまで、一年がかりで、その家は完成した。

私が起きると小学校の教員であった父や母は学校に行ってしまった後だった。テーブルには、ご飯やおかずがそのままになっていて、猫が乗って食べていたり、味噌汁のお椀が畳に転がっていたりした。私は畑からナスをもらいで来て油でいため、それを食べて学校に行った。それが毎日だったから、大工さんが、「この家は、なんだ」と、あきれた。食事の栄養バランスなど考えた事もなく、食事が美味しいとか、楽しいと思った事がなかった。それで平気な家だった。忙しいばかりで、家庭を考える暇が、だれにもなかった。

「ひどい、かわいそうな子ども時代でしたね。栄養が取れなかったから小さいのですね」「こんな話だったら、いくらでもあるわ。この頃から、だれとも話をしなくなり、笑わなくなっただけだよ」「今とは大違いですね。今は、しゃべりすぎ、笑いすぎ。今の生活が良いのは、だれのおかげかな。感謝してもらいたいね」「あなたには感謝しているわ」。

小さな親切

昔、「小さな親切」が流行った。しかし、それは迷惑という事で、「小さな親切、大きなお世話（おせっかい）」などと言われ、しだいに「小さな親切」という言葉はすたれて行つた。

「マーケット」での親切

腰の曲がつたおばあさんが、マーケットの入り口にいた。カートに手をかけたので、すかさずカゴを乗せてやった。「ありがとうございます」と、お札の言葉をもらつた。うれしいなあと思つた。私も、楽しい気分で買い物をした。帰宅して、「今日は、お年寄りに親切をしたのよ」と夫に話すと、夫は思いがけない事を言つた。「それは当然の事です。親切とはいえませんが」「そうですよね」。

「道を教える」親切

小田急線の新松田駅の構内で、北口に降りるか南口に降りるか迷っている人がいた。彼は地図の掲示板を見ていた。そして南口の改札を出て、私を追い越して行つてしまった。私は、「よし」と思った。

私が大通りに出ると、さっきの青年が踏切の方に行き、また引き返して来る所だつた。「どちらに行かれるのですか？」と声をかけた。一瞬、ビックリしてから、「足柄上病院です」と言つた。「この道をまっすぐ行くと、左の建物ですよ。すぐわかります」と教えた。「ありがとうございます」。

帰宅して、「今日は、道に迷っている人に、足柄上病院を教えてあげたのよ。この寒いのに、放置しておいたら、また駅に行ってしまう所だったわ。きつとあの青年は足柄上病院の先生か、技術さんだわ」と夫に話すと、「それは、よい事をしました」と、私を珍しくほめた。そして「地図の掲示板を見ている時点で、この人は足柄上病院に行くと、よくわかりましたね」「顔を見れば、すぐわかったわ。賢い感じで、さすががしかったわ」「その人は、きつと四月から新採用の人も知れないね」「寿司屋の角に、足柄上病院の看板があるといいのだけれど、看板を出す場所がないね」「場所などいくらでもあるさ。変電所の金網の所だっがいいだろう」「そうね」。青年は、私が指した道をまっすぐ歩いて行ってしまった。私は、自分も世話になるであろう足柄上病院で、良い仕事をしてほしいと勝手に期待した。

またある日の事、おじいさんに「眼科はどこですか？」と声をかけられた。「今、通り過ぎた、そこですよ。私に声をかけてよかったですね。このまま通り過ぎてしまったら大変でしたね」「ありがとうございます」。おじいさんは、眼科の大きな看板が出ていても、目が悪いので見えなかったのです。私は教えてあげられてよかったですなあと思いました。人助けはするものです。いい気分です。それでこの件は、すぐ忘れた。

十年後の今日、ハタと、おじいさんの言葉を思い出した。そして、「おや、この通りには、個人の眼科と、足柄上病院にも眼科があった。聞かれたのは、どちらだったのだろう。シマッタ、確かめないで教えてしまった」。もう後の祭りです。両方の眼科とも繁盛している。

「バス停を教える」親切

娘夫婦の住む湘南台に行った。小田急線の湘南台駅西口からは慶応大学行きバスに乗る。後ろに並んだ奥さんがバスの運転手に「南大山は停まりますか」と訊いた。運転手さんは「ハイ」と答えた。それを聞いていた私が「次ですよ」と、余計な事を言った。私は自分が迷った事があったので教えてあげたかったです。奥さんは私に「ありがとうございます」と会釈した。私は得意になり、いい気分だった。ところが、バスが発車すると真っ青になった。バス停は沢山あった。「南大山」は次のバス停ではなかった。「円行上庭」「藤沢北警察署前」「工業団地入口」、そして「南大山」。私はバスがバス停を通過するのをひたすら祈った。私の祈りが通じて、なんと一度も停車することなく「南大山」に到着した。私は、一番にパスモをピッと鳴らして降りた。続いて奥さんも降りて、五人の人が降りた。みんな目の前の大きなマーケットに吸い込まれるように入ってしまった。奥さんも買い物に来たようだ。つまり、湘南台駅西口バス停から「南大山」は「次」だった。乗客が全員降りたバスは慶応大学めざして猛スピードで行ってしまった。今日は平成二十七年元旦。

「荷物を持つ」親切

学生時代、私は電車通学をしていた。車内にいる大人から、「鞆が重そうだから、私の膝の上に置いていいですよ」と、しばしば声をかけられた。私は、学校の鞆の他に、楽譜やヴァイオリンを、いつもかかえていた。私も、階段を大きな荷物を持って上っている老人がいると、手が空

いている時は「持ちましよう」と言つて荷物を持つてやったりした。昔は、それが普通の事だった。今では、ありえない行為かもしれません。荷物を盗まれたら大変です。逆に、盗むと思われかねません。

ある日、真鶴の童謡の会の帰りに、駅前のトンネルの階段で声をかけられた。「重そうな荷物ですね、お持ちしましょうか」。振り返ると、私の娘たちより若い女の子だった。「すみません、お願いします。もうすぐ、七十歳なんですよ」と、しわがれた低い声で言つて、全部の荷物を持つてもらつた。女の子は、「階段は大変ですよね。七十歳には見えないですよ。お若そうですね」と言つた。トンネルの階段を抜けると、女の子は、ヘトヘトになつていた。「こんなに重いとは思わなかつた」と言わんばかりの顔で、荷物を私に返した。「ありがとうございました。助かりました。お世話様でした。またお願いします」。私は、ありつたけの感謝の言葉を言つた。そして、返してもらつた荷物を持つて、足をやや引きずるようにして駅の改札を通過した。駅の上り階段が目の前に立ちはだかつた。黒いリュックを背負い、手袋をした右手には丸めた模造紙や資料プリントの入つたバッグ、左手にテープレコーダーを持つて、「いざ」階段をエツシ、エツシと踏みしめて上がった。まるで映画『千と千尋の神隠し』の「銭婆（ぜにばア）」や「湯婆（ゆばアバ）」のように、ハイヒールの足を高く持ち上げて、大きな蟹股で上つた。それは、いつもの事なので、息切れをしたりするような事はなかつた。

小田急線の新松田駅に着くと、また「大きな荷物ですね、お持ちましようか」と、中年の女性が声をかけて来た。今日は、やけに私の荷物を持ちたがる人が多いなと思つた。この時は、あ

と十段ほどで階段が終わる所まで来ていたので「ご親切に、ありがとうございます。大丈夫ですから」と断った。荷物を駐輪所に置いた自転車に乗せ、川音川の橋の上を立ちこぎして、無事帰宅した。

私は、まだ他人に荷物を持ってもらう年齢ではない。重い荷物を持っている人があれば、率先して助けようと思っっている。

盲腸炎

これほど恐い病はない。

「長女」の盲腸炎

娘を悲劇が襲った。三、四日前から右側のお腹がシクシク痛い。冷えたのかと思つて風呂に入ったり、熱いシャワーを浴びたりして温めた。しかし、夜中になってさらに痛くなったので、たばな台病院の夜間診療を受診した。内科の若い宿直医は、レントゲンを撮つて便秘と診断した。

翌日、便秘の解消に温水プールに行つて泳いだ。ジョギングもした。夕方、ついに立つていられないほどの腹痛となった。熱も出ていた。受診した今度の内科医は、一目見るなり慌てた。「盲腸炎」だった。すぐ手術となった。幸いな事に、ちょうど他の患者の外科手術が終わつた所で、麻酔科などのスタッフが全員いた。「家族の方は」と言われて、私に連絡をしてきた。電話中に

院内アナウンスで「手術の池田さん、すぐに」と呼ばれ、直後に手術となった。

私は、ピアノ教室を切り上げタクシーに飛び乗った。昔、盲腸炎になった相撲取りが手遅れで亡くなったニュースをラジオで聴いた事を思い出していた。手が震えた。県立高校の教諭の夫に連絡すると、「会議が終了したら行く」との返事だった。千葉大学の学生の妹にも連絡をした。

手術は無事に終了していた。つけっ放しになった病院のテレビからNHK『生きもの地球紀行』のイメージ・ソング『Tomorrow』が流れていた。ゆるやかな癒しの曲だった。もう、夜の九時に近かった。夫も駆けつけ、先生と面談した。ホルマリン漬けになった大きな盲腸がビンに入っていた。「サンプルとして研究用に大学病院に送ります」と言われた。手術は成功だった。後日、生物の教諭の夫は、「あれを、もらっておけばよかった」と、しきりに後悔した。授業で生徒に見せたかったのでしょうか。

夜中、娘の下宿で、私と夫と妹で祝杯をあげた。コンビニで食糧を買い、車座になって宴会となった。「よかった、よかった」他に言葉が無かった。そろそろ麻酔が切れて痛くなる時間だったのに、患者にはおかまいなく大喜びした。私は「娘が一番で、夫は百番百番だよねえ」などと言って騒いだ。このようなテレビコマーシャルが大流行していた。

娘は翌週の月曜日に自分でお金を払って退院した。たちばな台病院は桜台団地の坂を下った所にあつた。完全看護で、パジャマもレンタルだったので、みんなが同じ柄の物を着ていた。同じパジャマでも違和感はなかった。隣りのベッドの患者は茶髪の痩せ細った娘さんで、内臓疾患のため黄疸が出ていた。危険な状態らしく、医師から親に連絡をするように再三言われていたが、

親は疎遠で来ることはなかった。「お母さんは来ないの」「どこにいるの、連絡は取れないの」と、看護婦さんも何度も聞いていた。その娘さんは、長女とはすぐ打ち解けて話し、週刊誌を貸してくれた。性格は素直で普通に見えた。言葉使いも悪くなかった。しばらくすると別の部屋に移った。今、元気でいるでしょうか。時々思い出します。

長女は大学に戻り、その後「ヨコハマ・インスパイヤーズ」でダンスをするほどまでに回復した。アメリカ遠征にも参加した。「傷口は小さくてきれいになっている。外科の先生は、腕がよかったです。でも、危機一髪だった」と言う。この時の話になると、なぜか大笑いで盛り上がる。私は、『Tomorrow』を聴くと涙がとまりません。本当に無事でよかったです。助かった命を大切に、長く生きてほしいと願っています。

◆NHK『生きもの地球紀行』は、総合テレビ毎週月曜日夜八時から放送。イメージ・ソング『Tomorrow』を作詞、作曲した杉本竜一は、昭和二十六年（一九五一年）東京生まれの作詞・作曲家。東京藝術大学大学院卒業後、ウイーン国立音楽アカデミーで学ぶ。映画・舞台音楽から合唱曲まで幅広く活躍している。今も続いているNHK『さわやか自然百景』も杉本竜一の作曲。

あせままだあせま 「秋山真之」の盲腸炎

日露戦争で活躍した秋山真之は、晩年、盲腸を悪化させ、二年にわたる療養の後、小田原市南町、天神山の広大な南斜面に建つ山下邸（対潮閣）の二階で亡くなった。山下邸母屋の南面には、スイスから取り寄せたというガラス窓がはめられていて、秋山が最期に見た海は、このガラス越

しの小田原の海でした。「坂の上」を目指した明治が終わった日でした。

私はNHK大河ドラマ『坂の上の雲』の秋山真之（演・本木雅弘）の清々しい生き方が気に入っていたので、小田原で亡くなったと知り驚いた。

山下邸は、山下汽船の創業者・山下亀三郎が、大正五年に建てたものです。石垣などが残る対潮閣跡は大正ロマンの夢のあと。大正時代から、今年で百年になる。

「とせいにん渡世人」の盲腸炎

テレビ時代劇『木枯し紋次郎』で、紋次郎（演・中村敦夫）は木曾路で腹痛に苦しむ十太（演・高橋長英）という渡世人に出会う。十太が「助けてくれ。昨夜から痛み出した腹が、もうたまらねえほど」と言うので、紋次郎は次の妻籠（つまご）宿まで十太を背負う。「腹くだしはしてねえから、食あたりじゃあねえと思うんだが、右の下腹が、差し込むように痛みやがって」。

宿に呼ばれた医者は「こりゃあ、冷えッ腹だ」と言った。風呂へ入れて、温めるのが一番と診断した。しかし、この病は、今で言う盲腸炎であった。傷み始めて一昼夜、すでに穿孔を起こして、細菌の多い便と膿汁が腹膜腔へ流れ出していた。したがって温めるのは禁物であった。医者は、やぶ医者で誤診だった。十太の命はもはや、風前の灯、手遅れだった。そんな事とは知らない二人は、宿の風呂に入る。「何とか楽になった気がする」と言っているうちに、十太は「ぼんやりしてきやがった」と、ぐったりした。寝込んでしまった十太は、最後の言葉を言う。「もう、なんにも感じねえや。紋次郎サン、短い付き合いだったが、ずいぶんと世話になったぜ。旅は道

連れ、同じ渡世人とはいふものの、俺ツチ、心の底から嬉しかった。紋次郎サン、礼を言わしてもらうぜ」と言つて、手紙を二通手渡し死んで逝く。紋次郎に託した故郷宛ての手紙には、「この男が仇の紋次郎だ、殺せ」と書いた。一通目でしくじつても、二通目で成功するように二通書いた。それとは知らない紋次郎は、自分を殺そうと思つている男たちに、わざわざ自分で手紙を渡しに行く。紋次郎は「あつしには、関わりのねえこつて」と言うが、いまわの際の頼みは、命を張つてでも引き受ける。男も惚れる好いやつだ。

十太はそもそも「桶川の松五郎」一家の身内で、松五郎を殺した紋次郎を捜す旅に出ていた。紋次郎は千代（演・宇津宮雅代）と別れる時、「十太のおかみさん、ずいぶんと御達者で」と渡世人の言葉で挨拶をする。紋次郎は美しい千代に一目惚れをした。惚れた女には、めっぽうやさしい（第二話「地蔵峠の雨に消える」）。

木枯し紋次郎は、旅の途中で川の水を使って体を拭いたり、湯治場で湯に浸かったり、宿の風呂に入ったたり、草鞋を作ったお札に河原の温泉に入れてもらったりする。中村敦夫の上半身は、ほっそりとしていて実に美しい。演技中、相手役の男優が惚れ惚れとして見とれているのが伝わってくる。他に、このような俳優はいない。ドラマでは風呂に入るシーンが、やけに多い。しかし、台詞には「あんまり好きじゃあねえんで、風呂が」と言うのがある。長ドスなして長湯をしていると襲われる危険があるためです。

「父」の盲腸炎

私が小学校低学年の時のことです。ある夏の日、父が「腹が痛い」と言い出した。夜中になると畳を叩いて「痛い、痛い」と叫び、転げまわって痛がった。母は「今は夜だから、朝になったら病院に行ったら。冷やした酒でも飲んだのでしよう。寝ていれば治る」と言った。父は、ますます痛がった。

私はラジオで力士が盲腸炎で死んだニュースを聞いたばかりだった。「お相撲さんのお腹を切るのって、大変だろうな」と思った。それで、これは盲腸炎かもしれないと思った。御殿場線の坂の下に代々続く商店があった。私は電話を借りに走り、タクシーを呼んだ。

額に汗をかいて痛がっている父を、タクシーに乗せて足柄上病院に行った。すると父は「もう、痛かアねえエや、さあさッ、帰ろう」と言った。検査をしてみようと盲腸炎で、すぐに手術になった。朝まで待つていたら死んでいた。小学生の私が、父の命を救った。

翌日、父は、隣りから見舞いの人と患者が蕎麦をススル音を聞いて、「うまそうだなア、食いてえなア」と言った。母が着がえを持って来て、「よかったわね、一週間程度で退院かしら」と気取った感じで言った。

父は、退院すると、裸になって盲腸の手術の後を見せてくれた。そして「何ともねエや、痛くもかゆくもねエ」と言った。それで、家族は父の盲腸の事を忘れた。

平成二十二年、父が九十五歳になった夏、「右の横ツ腹が痛い！」と言うようになった。次第に痛みが増した。「イテテ」と顔をしかめるようになった。そして、診察した医者は盲腸と診断し、

救急車で秦野赤十字病院の外科に搬送してしまった。慌てて駆けつけた私が盲腸の話をする前に、若い医師が「胆管癌のようです。高齢なので手術はできません。連絡する人があれば今のうちに」と言った。

そして、医者から輸血をすすめられた。「お願いします」。腕は点滴により針を打つ場所がないほど腫れ上がっていた。九十歳の時から、脳梗塞で右半身不随の父は、やっと生きていた。私は毎日見舞った。行くと「おおッー」と言っただけで動く左手をあげて喜んでくれたが、「毎日来なくてもいい」とも言った。自分が弱っている所を見られなくなかったのだという事に、後になって気がついた。その頃、父と同じ年齢の母は食事ができなくなり胃ろうを作って神奈川病院に入院していた。私は母も毎日見舞った。そして、ついに私も秦野赤十字病院に入院してしまった。病名は突発性難聴。「私も入院になっちゃった。隣の耳鼻咽喉科の病棟だよ。毎日ずっと一緒にいるよ」と言ったが、父は理解できていなかった。

輸血をすると、父は元気になった。医者が「お、元気になったね。退院かな」と言った。退院すると、二週間ほどは元気だったが、前より悪くなった。「痛い！」と言うので、再び秦野赤十字病院に入院した。医師から「輸血をすると元気になります、根本的な病状の改善にはなりません。もう一度輸血をすれば、また前回のように元気になりますが、その繰り返しです。輸血は多くの人の善意です。言葉は悪いですが、垂れ流して使うような事では」「もう一度だけ輸血をお願いします」「わかりました。そのようにしましょう」。

秦野赤十字病院の医師に言われると、「輸血は多くの人の善意」という言葉が重かった。私は、

人間の寿命がわかっていかなかった。高齢になれば当然だれでも死ぬということがわかっていなかった。一日一日、懸命に介護した。

結局、二回輸血をした。輸血後は医師が言っていたように、また元気になったが、今度は退院はかなわなかった。血圧、体温がどンドン下がり、チェーンストーク呼吸をして、平成二十二年十一月十五日、亡くなった。享年九十五歳。母は痴呆で、父の死も自分の事もわからなくなっていた。私は九十五歳の母をかかえ、不安で怖くてたまらなかった。「恐い、恐い、だれか助けて」。九月、十月、十一月が、飛ぶように過ぎて行った。

長生きの秘訣

人はだれでも、高齢で元気な人に向かって「長生きの秘訣は何ですか」と訊きたがる。自分も「あやかりたい」からです。

「森光子さん」長生きの秘訣

森光子さんが言った。「俳優は声が一番大切だから、風邪をひかないように、喉にガーゼのハンケチを巻いて寝ます」と。そうか、これはいい事を聞いた。私はさっそく試した。夏は暑くてたまらないが、冬はなかなかいい。しかし、私は突発性難聴が完治してから一度も風邪をひいていない。

さらに森さんは言った。「膝のくつしん運動を毎日百回続けています」と。そうか、これはいい事を聞いた。私もさっそくやってみた。しかし、三日坊主となった。膝を痛めては大変という気持ちがあった。

美少年たちに囲まれ、美しく長生きをしたいと、あれこれやっていた森さんは、平成二十四年十一月十日、九十二歳で亡くなった。森さんを囲んでいた青年俳優・タレントたちは、その死を心から悼む事はなかった。一瞬の時は過ぎて行つた。それで終わった。

「あれをやっています、これをやっていますと言つても、人は死んで逝くし、何もしていても人は死ぬ。みんな死んでしまったね」と私が言うと、「森さんは、あれこれやっていたから、九十二歳まで生きながらえたのさ」と夫が言った。

「瀬戸内寂聴さん」長生きの秘訣

大正十一年（一九二二年）五月十五日生まれ瀬戸内寂聴さんは。現在（平成二十五年）九十一歳です。ますます元気に法話をし、執筆活動、テレビ出演などをこなしている。大勢の人々から長生きの秘訣を訊かれる。

「ファンの人から、いろいろな薬や読物を送っていただけで、捨ててしまうのはもったいなから、全部試しているのよ。どれが効いているか自分でも、わからないのよね。このお酒なんか、ママシが一匹まるごと入っている、ほら」。

寂聴さんは、常に自分にも他人にも厳しい人です。話の中にそれがうかがえます。私には、法

話を聞いて笑っている人々があわれに見える時がある。その法話には世の中を痛烈に批判し、突き刺すような視点がある。

「城に住む老婆」長生きの秘訣

テレビを観ていると、ヨーロッパの城が紹介された。その侯爵の家に嫁いだ日本人は現在、九十八歳。嫁いだ頃は、毎日のように舞踏会が開かれていたそうだ。今は、その城に一人で住んでいる。朝起きると自転車のような足踏み器具で運動をする。「足が弱ったら、どこにも行けない」と。

次に、浜辺の広場で開かれる朝市に買い物に行く。朝食用に里芋を買った。老婆は、ゆでた里芋をフォークとナイフで食べた。私は、「豪華な城に住んでいるのに、朝食は里芋か」と思った。里芋は、一株の親芋に食べきれないほどの子芋を付ける。山形県の「芋煮会」は有名。里芋のネバネバが体に好いのでしょうか。

「わが家」長生きの秘訣

「小さい頃、おばあちゃんにあずけられて、食事をするのが一番いやだった」と大人になった娘たちが口をそろえて言う。「あのまずい食事をしていたから、おじいちゃんは長生きができたのかもしれない」「おじいちゃんは、おいしい、おいしいと言って食べていたね」「おばあちゃんの作ったもの以外、おいしい物を食べた事がなかったのさ」「そうだね」。この話になると、ここ

でその場にいた全員が納得する。おばあちゃんは、ほとんど料理をしなかった。買って来た食材をそのまま出した。また、自然食品の愛好者だった。自然食品には味がなかった。それでも信じて食べていた。おじいちゃんは「九十の坂をのぼるのは大変だ」と言っていたが、九十五歳まで生きた。おばあちゃんは九十六歳まで生きた。同じ食卓を囲んで生きた二人は、共に長寿だった。食事は最も大切なことです。

「黒柳徹子さん」の場合

黒柳徹子さんが言った。「朝着替えて、バナナを一本食べて出かける。仕事から帰ってみるとバナナの皮がテーブルの上にあるじゃありませんか。あたくしは、そういう時、一人はわびしいなと思うんですが、いままは、いかがでございますか」と。

その時は、「バナナを一本しか食べないのか」と思ったが、最近では、高齢者はカロリーを取り過ぎていてという食生活情報がある。一方で、肉を沢山食べようという情報もある。また、食糧がこれだけあるのに栄養失調と診断される人が多くなったと聞く。どうすればよいのだろうか。

「やなせたかしさん」の場合

子どもたちに人気の『アンパンマン』の作者、やなせたかしさんが言った。「僕は朝六時に起きて、NHK『みんなの体操』を観るんです。体操する女性アシスタントに好きな人がいるんです」と。やなせさんは、享年九十四歳で逝った。

「日野原重明さん」の場合

百三歳になった日野原重明さんの父親は教会の牧師だった。教会ではクリスマスに『きよしこの夜』を歌う。彼は母親のお腹の中にいる時から聴いていた。生まれてすぐに聴いた。そして三歳になると歌った。それ以来、百年も、ずっと歌い続けている。今年（平成二十六年）のクリスマスの日にも歌ってみせた。「ギネスものだ」とテレビを観ていた夫が言った。長生きの秘訣は精神面にもあるかもしれない。

笑う

笑いながら生きて行ける事を、みんなが願っています。

「歯科医院」で笑う

年頭に歯科医院から歯の定期検査の葉書が届いた。しかし、風邪が大流行し、東京を中心に学級閉鎖がテレビニュースになっていた。歯科医院で口を開けている間に風邪のウイルスが喉に張り付いたら大変だ。風邪の流行が去るのを待つて行くことにした。

正月が過ぎ、桜が散って春休みが終わったが、「磨くだけでも痛いから」と、一日延ばしになり、初夏五月になったある日、歯科医院に行った。すぐ私の番になった。歯科衛生士の若い女性が、「もっと早く来ていただかない」と言った。「痛いのは、いやなので、一日延ばしにしてい

たら今日になりました。なかなか決心がつかなくて、すみません」と言うと、院長先生が、「子どものだね」と言って笑った。診察室にいた他の患者三人と若い男女の歯医者二人と、歯科衛生士四人も、つられて笑った。部屋中に笑い声が響き渡った。

診察してもらい、「虫歯が無いので、これでお終いです。磨くのは、今日はいいいね」と言われて私が待合室にもどると、なんと待合室にいた五人の患者（私より高齢者）や受付の女の子も、「そうね」とか「まったくだね」と言いつつ、ほがらかに笑っていた。私は、「ありえない」と思っていた。さっきの話聞いていたに違いなかった。私は、本当に歯医者嫌いなのです。私が通院している歯科医院は繁盛している。

「内科」で笑う

病院の内科の待合室で長い間待たされた。後ろの席にいた夫婦の会話が聞こえた。

「予約制なのに、こんなに待たされる。もう十二時を過ぎてしまった」「病院だからしかたがないわよ。二、三時間待つのは普通よ」検査をしてもらいにきたのに、本当の病気になるそうだし「そうね」。

「昔は、先生が腹を触ったり、背中をたたいたり、注射をしたり、いろいろしてくれたのに、今じゃあパソコンを見て何か言うだけで三分で終わりだ」「昔の方が好かったねえ」。

今は検査・処置室があり、レントゲンや血液検査は専門の職員がする。それが瞬時にパソコンに入力され、それを見て先生は判断する。健康で異常がないので、診察は三分で終わりなのです。

「思ひ出し」に苦笑

娘が小さかった頃の事を時々思い出ししては苦笑する。ある日、小学校からがっかりして帰宅した。その落胆は、はたで見えていても、かわいそうなほどだった。

「今日の道徳の時間は、『落し物を拾った時、どうするか』の勉強だった。私は、一度も物を拾ったことがないから手があげられなかった」。

手があげられなくて、授業に参加できなかったのも、それで、がっかりして帰宅したのだった。「みんなは『一円拾って道祖神に供えた』『十円拾って、お母さんに渡した』とか、『百円拾って駅前の交番に届けた』と言っていたのに、だんだん額が多くなつて、『千円拾った』『一万円拾った』と言ひ出した。いいなあ、みんなは。私も何か拾つてみたいよ」と言うのです。

「他にも、手をあげなかった人がいたでしょう」「うん、その人たちは『今度、千円拾いたい』とか、『一万円の方がいい』と言つていたよ」。

この道徳の授業参観の事は、今でも時々思い出しして苦笑する。参観していた親たちは、どのように思っただろうか。先生は、どのようにまとめたのだろうか。

ある日、今度は小学校から大喜びをして帰宅した。「ねえねえ、お母さん、今日は『お米について』の社会科の授業があった。私だけが最後の最後に手をあげて発言したら、みんなが『オオッ』と言つたの」。

「家で食べている米の名前を教えてください」「コシヒカリ」「ササニシキ」「あきたこまち」「ひとめぼれ」「はえぬき」「どまんなか」など。「先生が『他にないかな。これくらいかな』と言っ

たので私が手をあげて、『ウチでは「きらら」を食べています』と言ったら、『ああ、「きらら」もそうだね。一人だけかな』と言われた。すごいでしょう。娘は誇らしげだった。

私は慌てた。「よかつたね」と言う声が消え入りそうだった。

「きらら397」は、夫が大学時代を過ごした北海道で研究開発された。北海道産のイネの品種の一つで、寒い土地でも良く実る。星の王子様のようなキララちゃんキャラクターのパッケージが可愛くて気に入っている。軽くて美味しい。お米の中では一番安い価格。という条件で「きらら397」を選んでいる。

この社会科学の授業参観の事も、時々思い出して苦笑する。参観していた親たちは、どのように思っただろうか。

東日本大震災の後、マーケットには大量に「きらら397」が並んだ。いつまでも高く積まれていた。私は、もちろん買った。

「女医さん」が笑う

春、顔が壊れた。目の周りが真っ赤になり、まぶたが腫れ上がった。いつも使っている目薬を、たっぷりつけた。鏡を見ると、もはや自分の顔ではない。マスクをかけて童謡の会をした。マスクをしたまま歌えたので驚いた。「心配御無用!」とか、「うつりませんから」とか言って笑いをとり、三月例会はなんとか終わった。

娘が「白塗りにするからだ」と言うので、もったいないなと思いつつ、使っていた化粧品を全

部捨てた。夫も「化粧なんて無駄な事だ。やめてしまえ。化粧をして、その顔を誰に見せるんだ」と言った。弱っているので言い返せなかった。ファンデーションの粉が目の中に入ったかもしれないと思ったので、洗い流すように目薬をつけた。

童謡の会員が「花粉症ではないか、私は病院に行つて薬をもらつたら、すぐ治りました」と助言してくれた。くしゃみ、鼻水、鼻づまりが無いので花粉症でないとは思つたが、家の前の二本ほどの梅が、今年は特に長く咲いた。目がシクシクしたので目薬をたっぷりつけた。目薬は首の方までダラダラと流れた。

『読む、歌う 童謡・唱歌の歌詞』（夢工房）の校正が来た。下を向いたまま字を追い続けた。ピアノを弾いて楽譜を確認した。目が開いていられないほど疲れた。目薬を、さし続けた。校正は三回あった。

さて、一ヶ月も経つたのに顔は壊れたままとなつた。また別の童謡の会員が「年じゃない」と言つた。それで、病院へ行く事にした。

秦野赤十字病院は、東名高速に乗れば、車で十五分の所にある。病院の受付の自動案内にカードを入れたが皮膚科が表示されない。「皮膚科が出ないのですが」と言うに係の人が「皮膚科はありません」と言つた。「日赤に皮膚科がないのですか」「すみません」。

夫の車に乗せてもらつて来たので、置いて行かれた私は困り果てた。バスは行つたばかりで次は四十五分後だった。しかたなく秦野駅前のロータリーの所の皮膚科を紹介してもらつた。春の日差しの中を、下を向いてトボトボと歩いた。

秦野駅前のビルの三階に、その皮膚科はあった。待合室は狭く、階段やトイレの通路まで患者であふれていた。後から来た人が「どれくらい待ちますか」「一時間ぐらいです」と受付の人が答えた。診察券を出しながら「女の先生でお願いします」と言っている人もあった。少し落ち着いて、まわりを見て驚いた。トビヒ、帯状疱疹たじょうほうしん、麻疹はしか、風疹ふうしんなど伝染するであろう患者も全員細い通路の待合室でひとかたまりになって自分の名前が呼ばれるのを、じっと待っていた。みんな静かに我慢して待ち続けた。第一診察室の中から男の先生の声が聞こえた。「洗い流せばいいんです。毎日風呂に入るので。その後、薬をつけて」「風呂は嫌いで、ほとんど入りません」「今日から毎日入ってください。毎日入らなければだめです。髪の毛も洗って、飲み薬は朝昼晩。わかりましたか」。戦場のようだ。

私の番になった。第二診察室にいたのは、美しい女医さんだった。「どうされましたか?」「顔が壊れてしまいました」「いつからですか」「二月二十日ぐらいからです」「随分長いですね。目の下の腫れが大きいですね。目薬をしていますか」「はい」「なぜ目薬をしているのですか。それは必要があつてのことですか」「ワープロを打つので目が疲れた時とか、目がシクシクした時にします」「その目薬をどうしてもしなければいけないのですか」「いいえ」「何という目薬を使っていますか」。とっさに目薬の名前が出てこないの、「テレビで宣伝しているEが効くとかいう目薬です」と言った。

女医さんは、カルテに歌手のROLLYさんの顔を描いた。目の周りをボールペンで黒くグジャグジャ塗った。これが私の顔、と思った。今の私はROLLYさんか。だんだん楽しい気分になった。

「これは病気です」と女医さんは断言した。「病気なんですか」「放置していてもなおりません。病気ですから」「もっと早く来ればよかったです。治るかと思ってお酢を飲んだり、コンニャクを食べたり、コラーゲンを飲んだり、生卵を飲んだりしました」。女医さんは、美しい顔にシワがよらないように注意しながら上品に、薄く笑った。「飲み薬と塗り薬を出します。五日後に、もう一度診せに来てください」「わかりました。ありがとうございます」。

帰宅して、「日赤には皮膚科がなかった。信じられないでしょう。秦野の駅前の皮膚科に行ったら、世にも美しい女医さんがいた。こんなに美しい人がいるなんて、同じ人間なのに悔しいなあと思った。私も、あんなに美しくなりたいよ。目薬が原因だって。信じられないよ」。すると夫が言った。

「その女医さんは、あなたより、ずっと若かったでしょう」「まあね」「女医さんだから教養も高いですね。比べ物になりません。ない物ねだりは止めましょう。原因がわかって好かったじゃあないですか」「そうね」「化粧が原因と思ったんだがなあ。意外でしたね」。夫は「化粧品が原因」と言い続けた。

普通の石鹸で顔を洗って塗り薬を付けて飲み薬を飲むと、次第に回復した。目薬は捨てた。もう、目薬はこりごりです。

五日後、再び病院に行った。「ほぼ治りました。先生のようにとはいきませんが、私も美しくなりたいです。先生が使っている化粧品を紹介してください」と言う言葉を用意して行ったが、美しい女医さんは休みだった。男の先生に化粧品の話はできない。別の塗り薬と飲み薬をもらっ

て帰宅した。四月の誕生日までに完治した。

「サル」も笑う

小学生の娘たちと小田原の動物園に行った時の事です。二人とも大喜びだった。サルの檻には沢山のニホンザルがいた。「すごいね」と言って妹が顔を突き出した途端、風がビューと吹いた。時を同じくして、一匹のサルが木から木へ跳び移りながら、おしっこをした。一瞬の風に乗ったおしっこが、鉄格子の向こうから妹の顔にかかった。「猿のおしっこがかかった」と言って、その顔を私たちの方に向けた。チリ紙を渡すと自分でぬぐった。泣くかと思ったが、泣かなかつた。「でへへ」と笑い、得意そうだった。姉が妹を心配して、「どの猿がやったの」と訊いた。「あれ」と指さす方を見ると、やんちゃそうな小サルだった。「おーい」「へーい」「わーい、わーい！」私たちは、口々に叫んで、その小サルに手をふった。この大騒ぎに、何だろうと一斉にサルたちが、こちらを見た。

「小田原動物園」は、こども文化博覧会が開かれた昭和二十五年（一九五〇年）に開園。アシカ、アジアゾウのウメ子、ライオン、ヒゲマ、タヌキ、キジ、クジャク、オウム、ウサギ、ニホンザルなどがいた。遠足でも行った。

しかし、動物園は、昭和三十四年（一九五九年）小田原城跡の国史跡指定後、「史跡にふさわしくない」とする国からの指摘のほか、獣舎の老朽化もあって、維持管理が難しくなった。市は、平成十七年（二〇〇五年）度から全国の動物園や公園に順次引き取ってもらった。ウメ子が

人間でいえば百歳を超える推定六十二歳で亡くなった平成二十一年（二〇〇九年）九月以降、平成二十七年（二〇一五年）現在、ニホンザル九頭のみが残っている。そういえば、全国の城址に動物園はない。「小田原城」は、昭和三十五年（一九六〇年）に小田原市制二十周年を記念して建てられた。

わがまま

老人のわがままほど、やっかいなものはありません。

「図書館」でのわがまま

図書館は、いつもと同じように混んでいた。本や新聞を読んでいるのは男の人ばかりだ。カリッ、ポリッ、カリカリ、ポリポリ、おや？ おやつを食べている人がいる。食べているのはポッキーかな、若者かな、注意をしようかな、と思ったその時、巡回の警備員さんが小声で注意した。小声だったので言葉が聞き取れなかった。すると、「わかっているよオ、気分わりいなあ」と、注意された人が大声で叫んだ。高齢の男性だった。若い警備員さんが、今度は聞き取れる声で、「よろしく願います」と、さわやかに言って去った。注意された男は、席を立つかと思ったが、そのまま居座った。しぶとかった。私は、若者に注意されるなんて、なさけないなあと思った。「図書館で、飲食をはいけません」。即座に対処した警備員さんは立派でした。

「フライド」が傷つく

旧・城内小学校に二宮金次郎の銅像の撮影に行った。おや、ない。尊徳記念館で展示してある写真にはあるのに、実際にはない。おかしい。清掃している女性に訊ねた。すると、古い建物の前にいた緑色のジャンパーを着た小田原市観光ボランティアガイドの人を呼んで来た。男は、私のお話を聞かない内に、「二宮報徳神社は」と言い出した。

「城内小学校跡地、ここに二宮金次郎の像があるようですが、どこにありますか教えてください」「知らねえな」。

「尊徳記念館は、わかりますか、展示してある写真に金次郎像が写っているのですが」「さあなあ。わからねえな」。

「それでは、観光ガイドになりません」「わかるかったな」。

これが観光客に対する説明なら、小田原市の評判を落とします。小田原市の恥です。わからない時は、「僕にはわかりません。すみません」と言うべきでしょう。

次に三の丸小学校に行った。バスターミナルにいた、さつきと同じ緑色のジャンパーを着た三人の小田原市観光ボランティアガイドの人に訊いた。

「金次郎像は、二宮報徳神社と報徳記念館前にある」「それは、もう撮影しました」。

「三の丸の方は、僕たちの範囲ではないのでわかりません。ここからこっちが僕たちの範囲です。あっちの方に行けばあるんじゃないですか」「わかりました。ありがとうございました」。

あっちの方とは、南町の本屋のあった方だ。しかし、ない。うろろろして運動場を見ていると像は入口の門の内側に移動していた。尊徳記念館の写真では歩道側にある。門が閉まっている。そこにあるのに、見えているのに。どうしよう。

工事の作業員の人が自分の車を出そうとして門を開けた。「あの金次郎像を撮影したいのですが、中に入れていただけませんか」「僕は学校の者ではないので」「このカメラで撮って来てもらえませんか」。必死になった。すぐそこだ。

「ちよつと入って写真撮るぐらいならいいんじゃないですか」「一緒に、そばにいて、お願い」(私はこの言葉を日常よく使うが、見ず知らずの男性に使った事はない。自分で言って驚いた)。

必死で、三枚写真を撮った。その間、その人は、私の近くにいてくれた。「ありがとうございました。今は、子どもの事件が多いので」。無断で学校内に入った罪悪感があった。

バスターミナルのガイドの人にも「写真、撮れました。交差点を渡った所、まっすぐ目の前にありました。ほら、ここから見えますよ。お世話になりました。ごきげんよう」と教えてあげた。「よかったですね」。

さて、もう一度、城内小学校跡地にもどった。校庭を一周した。「あった」。校門の左わきに台座だけあり、上にあったはずの銅像はなかった。

尊徳記念館の館長が私の話を一部始終聞いてから、展示の写真に「旧・城内小学校の二宮金次郎の銅像は小田原駅にあります」とコメントを書き加えてくれた。館長によると、しばらく尊徳記念館に保管されていたのだそうです。そうになると、尊徳記念館に展示してある「旧・城内小学

校の二宮金次郎の銅像」の写真は、大変貴重な物ということになります。

さて、帰宅して夫にガイドの話をする、夫は「それって普通だよ」と言った。私は驚いた。ガイドは小田原弁で、「知らねえな（僕は知りません）」、「さあなあ。わからねえな（さあ、わかりません）」、「わるかったな（ガイドなのに知らなくて説明できず、悪かったですね、申し訳ないです）」と言っている。

そういえば、尊徳記念館の館長も、私の話を聞いて、この事については何もコメントしなかった。小田原弁で普通だからです。しかし、小田原弁は汚い言葉です。

ガイドの男は「それでは、観光ガイドになりません」と言った私の一言にプライドが傷ついたに違いない。ガイドは定年退職をした高齢者がほとんどで、昔は教師とか、会社では課長・部長職にあった人たちだ。頭を下げて謝る事が一番苦手なタイプだ。そのような人が、他人に頭を下げるのは、なかなかプライドが許さないものです。

あお
扇ぐ

日本には、扇子や団扇で扇ぐ文化がある。

「貴船まつり」の扇

七月二十七日と二十八日は、真鶴の「貴船まつり」です。花火が鳴り響き、いよいよ祭りの花形「小

早船」が宮本から宮前に向けて出航です。「真鶴ばやし」が祭りを盛り立てます。太鼓の音が、いっそう楽しく、みんなを笑顔にさせてくれます。男衆の唄も聞こえます。アマチュアカメラマンが一斉にシャッターを切りました。私も夢中で写真を撮りました。

観光客の中に白い杖を持った男の人がいました。観光ガイドのような女性が、パンフレットを見ながら進行と時間を説明しています。「さわる事はできないの？」と目を閉じた男性が訪ねました。こんなに明るい陽ざしなのに、こんなに楽しい雰囲気なのに、どんなに言葉をついやしても、目の不自由な男性にはわかりません。ましてお祭りが、みんなの心を一つにしている事などわかるはずがありません。高く低く、しの笛の響きは、祭りが華やかなほど孤独で悲しい。

青い空には低く白いカモメが飛び、トンビが高く輪を回して舞っています。青い海の上を、造花の花や無数の提燈で、きらびやかに飾られた「小早船」は、大きく船体を揺すりながら進みます。揺れるたびに赤、黄、青、緑、金、銀が太陽に輝き、光の環がはじけます。「きれい、きれい」と手をたたき、「行って来いよーッ」と船に向かって手をふりました。涙がこぼれるほどの美しさです。

祭りの船は真鶴港湾内の海上をしばらく進むと方向をかえて、貴船神社のある魚市場（宮前）に到着しました。先頭の「小早船」の舳先には監視の役割をする「舳乗り」が乗船しています。時代劇に出て来る格式が高い老代官、または神社奉行のように見えます。小袖の上から半袴を付け、袴をはいている。そして黒の陣笠をかぶり、脇差をさし、手に持った扇で時折扇いでいます。ゆるりと扇ぐ姿が絵になっています。この人だけが礼装なので、特別に暑そうです。

「舳乗り」は、船頭・權使い・水夫の若い衆が船から降りても、大勢のカメラマンが全員写し終わるまで、じっと我慢強く座っていました。観光に一役買っていました。私は、また拍手をして、大声で「おっちゃーん、ご苦労さんでーすっ」と手をふりました。「うむ、皆の衆も御苦労であつた」。この日は晴天で三十五度の猛暑でした。

◆「舳乗り」は、世襲制です。七月二十七日（宵宮）の朝、祭典推進本部役員が舳乗り宅に向かいます。口上が述べられ、舳乗りを迎え、海岸の小早船置場へ向かいます。小早船置場に着くと乗船し、水浮けの準備が整います。

「織田信長」の扇

二十七歳の織田信長は、人生最大の危難を迎えていた。永禄三年五月十九日未明（桶狭間の戦い前夜）、駿河（静岡県中部）など三國を領する今川義元の大軍の尾張（愛知県西部）侵攻の知らせを聞いた。敵は約十倍で勝ち目は無い。

この時、清州城（愛知県清須市）の織田信長は、「人間五十年、下天の内を比べれば、夢幻の如くなり（人の世の五十年の歳月は、下天の一日にしかあたらぬ）」と、まず「敦盛（幸若舞の演目のひとつ。作者と作年は不詳）」の一節を謡い舞い、陣貝を吹かせたうえで具足を着け、立つたまま湯漬を食したあと甲冑を着けて出陣したという太田牛一の『信長公記』の伝記が有名です。結果、桶狭間の戦いで今川義元を打ち取り、天下統一への第一歩を踏み出した。

テレビ時代劇や映画の信長は、ヤリや扇を持って謡い舞う。平成二十三年（二〇一一年）のN

HK 大河ドラマ『江〜姫たちの戦国〜』の信長（演：豊川悦司）が人気だった。信長が出る回は視聴率がグンとアップした。主演の江役はテレビドラマ『のためカンタービレ』で脚光をあびた上野樹里さん。

「平清盛」の扇

平成二十四年（二〇一二年）のNHK大河ドラマ『平清盛』の清盛（演：松山ケンイチ）は「平家（平氏）にあらずんば人にあらず」と赤い扇を手に力強く舞う。

「相撲観戦」で扇ぐ

テレビで相撲を観戦する。力士は差し出されたタオルで汗をぬぐう。ますせき 柵席の観客は、うちわ 団扇や扇子で扇ぎ、焼き鳥やビールを飲みながら観戦している。楽しそうだ。私も両国の国技館に家族みんなで行って山形県出身の「琴ノ若」を応援した事がある。

しかし、よく観ると、審判や控えの力士、付き人や呼び出しや行司、土俵に最も近い棧敷席にいる観客や新聞社のカメラマン、そして解説者は、飲んだり食ったりしていない。もちろん団扇や扇子で扇いでいない。

平成二十四年九月二十三日、秋場所（両国国技館）の千秋楽は、いつもと違っていた。団扇や扇子で扇いでいる人は、だれもない。真剣に土俵上に注目している。アナウンサーが「緊張しますねえ」と言った。全勝の大関日馬富士（モンゴル出身、伊勢ヶ濱部屋）が、一敗の横綱白鵬

(モンゴル出身、宮城野部屋)と対決した。真つ向勝負の歴史に残る大一番になった。最初は白鵬が優勢だったが、日馬富士は全身全霊を傾けて戦った。渾身の力比べになった。自分の力をすべて出し切つて、最後は白鵬を振り回し、豪快な下手投げで大熱戦は決着した。日馬富士が二場所連続全勝優勝を果たした。二分近い攻防戦だった。「やった、すごいぞ日馬富士」「これぞ相撲だ」「よくぞ見せてくれた」。みんなが拍手をして歓声をあげた。日馬富士を祝福した。日馬富士は、びっしりかいた汗を黄色いタオルで気持ちよさそうに何回もぬぐつた。

優勝インタビューで、「これからも、みなさんに感動と勇氣、希望を与える相撲を取り続けます。応援よろしくお願いします」と語つた。熱気の中に、さわやかな声が響いた。会場の全員が素晴らしい相撲に魅了され、扇子や団扇で扇ぐのを忘れていた。

「校長」は扇ぐ

開成町にある県立高校に行った。来客として校長室に案内された。画家の落谷虹児がデザインした校章について話した。

「落谷虹児は、昭和十九年(一九四四年)から山北町に疎開していました。あの有名な美人画家が山北に住んでいた事は、ほとんど知られていません。童謡『花嫁人形』の作詩者です。

虹児は、趣味の鮎釣りが縁で知り合つた、郵便局長・鈴木隆造(後の山北町町長)の世話で、一家は山北町堂山の種徳寺に間借り。やがて寺の下に三保村から小さな家を移築しました。家の前には御殿場線が走っていました。路線に面した家の白い壁に「虹児」のサインを大きく記し、

屋根はおとぎの家のように赤くしました。東京からやって来る編集者たちへの目印です。

戦後もここに留まり畑を作ったりして食糧難をやり過ごしました。昭和二十九年（一九五四年）に小田急線玉川学園前駅に近い丘陵に家を新築し引越すまで、山北町に溶け込んで暮らしました。

虹児は、神奈川県立山北高校の校歌を作詞（作曲・小松耕輔）し、校章のデザインも考案しました。また、山北中学校と、県立吉田島農林高校（現・吉田島総合高校）の校章、さらに山北音頭の作詞（作曲・米山正夫）も手がけました。

私は、話しながら次第に気落ちした。校長は、私の話を聞かず、バタバタと手にした団扇で自分の顔を扇ぎ続けた。上の空だった。

「これは、私のインターネット検索『池田小百合なっとく童謡唱歌』に掲載してある童謡『花嫁人形』の打ち出し原稿です。そこにあるパソコンで見た方が、色が鮮やかです」と言ったが、校長はパソコンの操作ができないようだった。高校の名前を横浜銀行の冊子『マイウェイ』の誌面に出す事の許可をいただいて帰宅した。

東日本大震災の電力不足を補う計画停電を無事に乗り越えて、六月、できあがった『マイウェイ』監修・文 池田小百合「かながわ童謡唱歌物語〜歌の歴史再発見〜」を持って、再び高校に行った。校長室に通され、『マイウェイ』を渡して説明をした。校長は、来客である私の目の前で、またバタバタと団扇で扇ぎ続けた。校長は私の話を聞いていなかった。『マイウェイ』を手に取ってページを開いて見ようとしなかった。残念で情けない事だった。

『マイウエイ』の内容が悪かったわけではない。『マイウエイ』を童謡の会で配ると好評だった。

「祈りの沖繩」は扇ぐ

「慰霊の日」は、昭和四十年（一九六五年）六月二十三日に沖繩戦の組織的戦闘が終結したことにちなんで、琉球政府及び沖繩県が定めた記念日です。

平成二十四年（二〇一二年）六月二十三日「慰霊の日」に、沖繩戦終結六十七年の追悼式が行われた。沖繩はもちろん日本中が祈りの一日だ。朝から暑い。参加者は約五千五百人。式典では沖繩県知事や野田佳彦首相の挨拶があった。参加者はハンカチやタオルで汗をぬぐい、団扇や扇子で扇子続けた。本当に暑そうだ。

沖繩県立首里高校三年の金城美奈さんの平和の詩「礎に思いを重ねて」の朗読が感動的だった。同じ年頃で戦場に命を落とした大伯父を思って書いた詩。「抱えきれないほどの未来が、あなたには待っていたはず」「勉強に励む人だったと聞いた。かなえたかった夢もあったはず」「私たちにできることは、あの日を二度と呼び戻さないこと」「戦争のない世界を築いていきたい。米軍基地は沖繩からなくなつてほしい」と。

この詩には訴える力があり、私は涙して聞いた。同じ年齢の高校生は、どのように聞いただろうか。金城さんの詩の朗読の間も、みんな団扇や扇子で扇子続けた。詩の朗読は短時間だったのに。私は、「沖繩、それでいいのか」と怒った。

「沖繩戦」は、太平洋戦争末期の昭和二十年（一九四五年）春、米軍が沖繩本島と周辺離島に

上陸して始まった地上戦。戦闘に巻き込まれた沖縄県民の四人に一人が死亡し、日米双方の犠牲者は二十万人以上になった。日本軍の組織的戦闘は六月二十三日、第三十二軍の牛島満・司令官の自決で終了したとされているが、その後も戦闘は続き、降伏調印は九月七日にずれ込んだ。日本軍による住民への「集団自決」強要やスパイ容疑での住民虐殺が発生し、沖縄で軍隊への根強い不信感が生まれた。

「映画の客」は扇ぐ

日本最高齢九十九歳、話題の新藤兼人監督作品「一枚のハガキ」を秦野市文化会館に観に行った。映画館以外の所へ映画を観に行くのは珍しい。連日三十五度の猛暑の中、洪沢駅から歩いた。会館には既に大勢の人が詰めかけていた。全員が団扇と扇子でバタバタ扇ぎながら、ワイワイ雑談をしていた。節電のため、団扇は自由に使うように会館が用意していた。

映画が始まると、だれも扇いでいる人はいなくなつた。主人公・友子の最初の夫（長男）は戦争で死んだ。骨壺は無く遺骨は戻って来なかつた。戦場で死んだのではなく、南方へ行く途中で輸送船が撃沈された。同じ部隊の六十人も死んだ。友子は、当時のしきたりで、農家の長男が死んだので、当然のように次男と結婚した。

二番目の夫（次男）は、結婚の日「姉さん、どうぞよろしく」と挨拶した。しかし、結婚後すぐ召集令状（赤紙）が来て、あつけなく死んで逝つた。義父は農作業中に脳溢血で死に、義母は首を吊って自殺した。このような呪われた家の現状を観ていては、当然、団扇や扇子でバタバタ

と扇げない。扇げるはずがない。涙を流す人、鼻をかむ人はいた。

戦争末期、中年兵として徴兵された男は、終戦後に仲間の兵士から託された「一枚のハガキ」を持って、ハガキの送り主である兵士の妻・友子を訪ねる。

ここからは、反戦のメッセージが次々繰り広げられる。恐ろしいほどの激しい友子の感情むき出しの演技に、後ろの席の男性が「あれは、だれだろう」と言った。隣りにいた奥さんが「女の方は大竹しのぶで、男の方は豊川悦司よ」と言うのが聞こえた。

「一枚のハガキ」を持って来た男（演：豊川悦司）は友子（演：大竹しのぶ）の三番目の夫になった。「一粒の麦を蒔こう」と男が言う。一つの小さな希望だ。そして麦が実る。麦畑のラストシーンが美しい。「皆のぶんまで生きて行こう」と男が言う。希望は現実になり未来につながる。

背が高くほっそりした俳優の豊川悦司は、汚れた服装でも女性のファンの心をグッとつかむ。ライターでタバコに火を点ける演技は、彼が出演するドラマで必ずある。この映画でもあった。長い指が印象的です。演技が自然体なのは、日常生活でもタバコを吸っているからでしょうか。肺癌が心配です。

自殺した義母役の倍賞美津子も、汚れた着物を着ていたのに美しい。美しいので農家の老女役にはむいていなかった。また、「演技をしています」という臭い役者も沢山出ていて、映画は「好い」と評価する人と、「悪い」と評価する人に大きく意見が分かれた。この日、映画を観ていたのは、中高校の男女。圧倒的に女性が多かった。若い人はいなかった。

戦争末期に徴集された部隊の兵士百人のうち、九十四人が戦死し、六人が生きて帰って来た。

その生死を分けたのは、上官が彼らの任務先を決めるために引いた「クジ」だった。この映画は、自身が生き残った兵士十六人のうちの一人である新藤監督の実体験を元に作られた。監督は、明治四十五年（一九一二年）四月二十二日生まれ、平成二十四年（二〇一二年）五月二十九日、満百歳で亡くなった。「生きているかぎり 生き抜きたい」という言葉を残した。

◆（出演）豊川悦司、大竹しのぶ、六平直政、柄本明、倍賞美津子、大杉漣、津川雅彦、川上麻衣子、絵沢萌子、大地泰仁、渡辺大、ほか。（音楽）林光。

「童謡の会員」は扇がない

私が主宰している童謡の会は、公民館で活動をしている。公民館は節電をしている。「通路が真っ暗だったから、今日は童謡の会がないのかと思った」「他の公共施設では、もっと徹底している」と言う人もある。童謡の会の会員は徒歩か自転車である。四階の会場まで階段を上って来る人も多い。元氣です。どこの公民館も六月は節電で冷房が入っていない。七月も冷房を入れない所もある。暑い、むしむしする。各会場は三十人から七十人入る。我慢大会のようだ。しかし、文句を言う人はいない。我慢強い。歌声がもれるので窓は開けたくないが、暑さに耐えかねて窓を大きく開いて歌う。他のサークルや近所の家に迷惑と思うのは始める前だけで、始めてしまえばすぐに忘れる。歌声には自信があるから聞かれても何も問題はない。会場を見渡すと、みんなハンカチやタオルで汗をぬぐったり扇子で扇いだり水を飲んだりしている。

童謡の会が始まると、扇子でバタバタ扇いでいる人は一人もいなくなる。理由があります。ま

ず、歌詞集のページを開く。歌詞を読む。歌を歌う。解説を聞きながらメモを取る。配布された資料のプリントを黙読しながら話を聞く。この繰り返しでは、扇子で扇いでいる暇などない。一時間半、私がグイグイ引つ張って行く。初めて入会した人が、疲れてぐったりしているのを見ることがある。

私の童謡の会には、大正四年（一九一五年）生まれの元気な女性が来ている。平成二十七年九月で満百歳。私はこの人の動向を見ながら童謡の会を進めて行く。「〇〇ページを開いてください」と言うと、この人はサツと開く。まだ開いていない周りの人を見て、「先生が〇〇ページと言われたよ」と、自分より若い人に教えている。したがって、現在の童謡の会のスピードは悪くないと確信している。この高齢の女性も、扇子で扇ぐ事はない。真剣に歌い、解説を聞き、メモを取っている。彼女は立派な短歌を作る。自分では謙遜して「へば短歌」と言っている。メモを取るのはお手の物だ。当然、扇子で扇いでいる暇などない。終了後、必ず丁寧な挨拶がある。「今日も楽しかった。あと何回来れるかわからないけど、できるだけ来ます。先生に会いたいから来るんだ。来月は来れるかな。わからない。来れるといいな。ありがとうございます」と。

童謡の会がある日は、朝出がけに、夫が「今日も、あの人が来ているといいですね」と言ってくれる。私は、一番に会場に来るこの人を守つたために、公民館が開く一番に行くようにしている。生徒より先生が遅れていいわけがないからです。公民館は八時半に開く。童謡の会は十時から開催する。

二十四節氣の一つに「大暑たしよ」がある。これから、暑さの盛りだ。私は「暑い」のに強い。そ

う思い込むようにしている。そう思い込むと、みんなが「暑い、暑い」と言っていて涼しい顔でいられる。毅然きぜんとして童謡の会の指導ができる。指導をしながら団扇や扇子で扇ぐことはない。話したり歌ったりしている喉には「冷たい風」は禁物。一瞬でも「冷えた風」を吸い込むと喉を傷める。最も注意している事です。実際、暑い方が元気に歌える。冬の寒くて乾燥した空気より、夏の暑くて湿度が高いほど喉が潤って声が出る。暖房の乾燥した空気、冷房の冷たい空気は声には毒だ。さらに、春と秋の季節の変わり目の温度差には、マスクをして一番注意している。帽子、マスク、襟巻は欠かせない。夏は、ハンカチを二枚も三枚も持ち歩く。ハンカチは必需品です。団扇や扇子は持っていない。

「大滝秀治」は扇がない

俳優・大滝秀治が平成二十四年十月二日に亡くなった。追悼番組を観ていると、次のような言葉を残していた。

「扇子は使わない。役が扇いでいると手から逃げて行ってしまいそうだから」と。享年八十七歳。映画「あなたへ」が最後の映画になった。思いを込めた最後の台詞は主役の高倉健を泣かせた。それは、大滝扮する船頭の大浦吾郎が、「久しぶりに、きれいな海を見た」と語るシーンだった。

よく寝た

「眠れないので睡眠薬を飲んでいます」と言う人に出会った。「そのまま起きられなかったら困るでしょう。大変な事になりますよ」「薬を飲んでも眠れない」と彼女は言った。タクシーの運転手さんも、「大きな病院では睡眠薬がもらえないので、小さい病院にかかっている。睡眠薬を飲んでも、明け方、目を覚ましてしまう」と言った。

私は、これまでで「ああ、よく寝た」という経験が三回ある。

一回目は、千葉県花見川区の娘の下宿に泊まった時だ。その下宿は六室ある二階建てのアパートで、娘は二階の南側の部屋に住んでいた。南側には小学校があった。夜は静まり返っていた。東側はドンダリの林で、林の向こうに老人ホームがあった。昼間も静かだった。道幅の狭い道路の向こう側は、昔からの閑静な住宅街が続いていた。アパートの住人は息をひそめ、だれも住んでいないように静かな暮らしだった。風呂に入って寝ると、朝までぐっすり寝た。

翌朝、「お母さん、よく寝ていたよ」と娘が言った。頼んだ『春夏のうた』『秋冬のうた』の表紙絵が完成していた。私が寝ている脇で、娘は一晩中かかって絵を描いていたに違いないのだが、全く気が付かなかった。「真っ暗でないと眠れない」「枕がかわると眠れない」と言う人があるが、それはウソだと確信した。「ああ、よく眠った」、すっきりした朝だった。心がうきうきした感覚だった。

二回目は、秦野赤十字病院で。突発性難聴になり入院した時だ。「朝ですよ。カーテンを開けます。

よく寝ていましたね」と看護婦さんが言った。私は死んだように眠った。親の介護、子どもたち夫婦の事、夫の事、親戚の事、母に借りた金が多額となり返済できなくなつて土下座をした近所の主婦の事など何も考えないで寝た。金曜日に入院して土曜日、日曜日の三日間、六人部屋に一人で寝た。ピンクのカーテンを開けると富士山が見えた。「ああ、よく眠った」、秋晴れの青い空。頭が軽い朝だった。

その後、月曜日から六人部屋は満員になり、耳鼻咽喉科の隣の外科病棟からは、患者の嘔吐の声や、医師や看護婦の声が絶え間なく聞こえた。大声で何か叫んでいる患者もいる。そこは、さながら戦場だった。私は、八日間入院して退院した。

三回目は、長女の出産が終わつた日の夜、ホッとして眠った。翌朝、夫が「安心したのでしよう。二、三日分も、よく眠っていましたよ」と言った。

平成二十五年十一月一日（金曜日）が予定日だった。娘に電話をしてみると、「病院に行つて来たが、頭が下で、出る形になつているけれど、まだなんともない。歩くように言われた。次の診察は五日、五日までには出したいと思つている」。

十一月二日（土曜日）、じりじりと、心配して待った。何の連絡がないまま一日が過ぎた。

十一月三日（文化の日）、童謡の会の例会をしながらも、心配を続けた。「逆子になつて、へその緒が首に絡んで、それを赤ちゃんが自分で両手で引つ張つて、死んでしまつたら、どうしよう。死産だったら何と言葉をかけたらよいのか」。あらゆる悪い事が頭をよぎつた。普通の親と、全く違う心配をした。胃がキリキリと痛んだ。食事が喉を通らなくなった。

十一月四日（振替休日）、雨が降った。朝電話をすると、「十分おきに陣痛が来ている。五分おきになったら病院に行く。診察室には一人だけ入れる。旦那さんが入るから、お母さんは、生まれたら見に来てね」との事だった。「赤ちゃんは動いているのか」と、つい訊いてしまった。「大丈夫だ」との返事だった。「うまく出産できるかしらねえ」「大丈夫かしらねえ」「まだかしらねえ」と言い続けて一日が過ぎた。夜、九時半に娘から連絡があった。五時半頃生れたようで、その声は疲れ切っていた。「生れたよ。母子共に元気」「明日、病院に行きます」「明後日から赤ちゃんと同室になります。だから、明日来ても、赤ちゃんに会えない」「明日も、明後日も行きます」。十一月五日、晴天。藤沢市辻堂の吉田クリニックは全室個室だった。大きな紙袋に妊婦用の着替え、タオル、紙オムツなどのセットが準備されていた。親が準備してやる物は何もなかった。着替えを家に持ち帰って洗濯をする必要がなかった。便利な時代になったものです。娘は元気だったが、とても疲れているようだった。

「臨月まで通勤、よく頑張りました。出産、ご苦労様。おめでとう」「お母さんが、いろいろアドバイスしてくれたのでよかった。江の島の方まで歩いたり、猫のポーズをしたり、大変だった。旦那さんは分娩室にいても、オロオロしているだけだった」。

「お母さんのアドバイスってなに」と夫が訊いた。「痛くても、大声を出すと体力が低下してしまふ。わめいて暴れていると、医者や看護婦さんの言っている事が聞こえない。赤ん坊の方も出ようと頑張るから、それに合わせるように。と言っただけだよ」「そんな事が言えたんだ」「こんな、普通だよ。どこの母親だと言える」「そうですか」。

翌日六日も行った。今度は赤ちゃんがいた。すやすや寝ていた。「初めまして、オバアだよ」「ほら、かわいいでしょう。自分の子が一番かわいい」と赤ちゃんを抱く娘は、おぼつかないが、まさに母親になっていた。ウンチのオムツを代えると、ひとしきり泣いた。娘が「自分の子どもは、かわいい」と喜んでるのが、嬉しかった。髪の毛が黒々としていた。髪の毛を少しなでた。手足をモニョモニョ動かし、あくびを一つすると、またすやすやと眠った。

男の子だということは、エコー検査ですでにわかっていた。男子誕生は、明治十九年に私の母の父親が誕生して以来の事です。母が女三人姉妹、私が一人っ子、私は女の子を三人出産したが、最初の子はヘソの緒が首に巻きついて死産だった。それは十万回に一回の事だと聞いたが、慰めになっっていないかった。つまり、三代目からは女ばかりが続いた家系でした。名前は怜央（LEO）と決まった。私は準備していた言葉を大きな声で言った。「怜央、いい名だね」と。明るい家庭で、元気に育ってほしいと願っています。